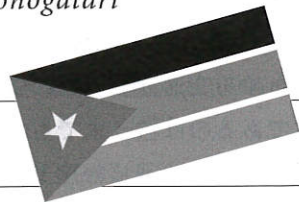


マラカル市内にあるDr.ジョン・ガラン小学校で算数の授業を受ける児童

MALAKAL 物語 monogatari

南スーダン国造り支援の現場から

第13話 コンパスで円を描く



中坪 央暁 (本誌編集委員)

「0.475というのは…1,000分の475だね。分母と分子を5で割ると？ そうだね、200分の95になる。もう一度5で割ってみよう…そう、40分の19だ。これ以上は割れないね？」。教師がひとつひとつの計算を問い掛け、約50人の男子児童が声を揃えて答える。小学校5年生の算数の授業で、少数を分数に変換する計算法が教えられていた。算数はあまり好きではなかったが、遠い昔こんなことを習ったなど少し懐かしく思い出す。教科書は使っておらず、男児たちは板書を几帳面にノートに書き写している。

“南スーダン独立の英雄”である故ジョン・ガラン南部スーダン自治政府初代大統領の名をそのまま冠したマラカル市内の公立Dr.ジョン・ガラン小学校。男女別学で授業を行っており、このうち男子部は初等1～8年生の779人、教師は28人いる。履修科目は英語、算数、理科、社会、宗教の5科目。アンドリュー・オチャ・アウン校長は「南スーダンの公用語は英語ですが、スーダン時代からアラビア語で教育を受けてきた7～8年生にはアラビア語で教えています。宗教とはキリスト教の教義の授業ですが、イスラム

教徒の児童が多い学校では今もイスラム教を教えているようです」と、やや複雑な状況を説明する。

初等教育支援として、国際協力機構（JICA）は「南部スーダン理科教育強化プロジェクト」（通称SMASESS、2009～13年・技術協力）を実施してきた。南スーダンの小学校の就学者数は、内戦終結時の05年の30万人から独立時の11年に130万人まで急増したのは良いが、教員3万6,000人のうち正規の資格を持つのは5分の1程度に過ぎず、とりわけ論理的な思考力を養う理数系は「分数あたりから怪しくなる教師が多い」のが実情だ。SMASESSは教育省をカウンターパートに、全10州から研修講師を選抜してジュバで2週間の研修を3サイクル行うとともに、モデル5州で研修講師を通じた研修を実施している。教科の内容や教授法を基礎から学び直すとともに、研修講師が現場のモデル教師を指導する“カスケード方式”によって、教員や教育行政担当者の能力向上を図ってきた。その総数は中央の研修講師5人、州レベルの講師70人、全国で研修を受けた教師は延べ2,000人以上に上る。プロジェクトはこの6月をもって終了し、4月中旬にジュバを訪問した際には、総仕上げとなるリフレッシャーコースが行われていた。

事前調査から丸5年間携わった高校教師出身のチーフアドバイザー中村由輝（フジタプランニング）、青年海外協力隊OBで東ティモールの高等教育支援の経験を持つ島津英樹の2人の専門家、さらに11年以降は日下智志（日本開発サービス）を加えた3人体制を組み、原則としてモデル各州で3サイクルの研修を実施するとともに、学習効果を高める教材づくりを進めてきた。

日本の公立校勤務に加え、青年海外協力隊（ドミニカ共和国）やインターナショナル校の経験を持つ日下は「子どもたちの学習意欲を引き出し、積極的に参加させる児童中心の授業がようやく浸透してきました。教材や教具がほとんどないので、理科実験ではペットボトルなど身近なものを工夫して使っています。算数の場合も、これまでコップの縁をなぞって円を描いていたため、中心点や直径・半径の概念を良く分かっておらず、研修で初めてコンパスを使ったという教師が少なかったようです」と話す。

Dr.ジョン・ガラン小学校の45歳のベテラン教師、ティボ・アジャン・クルは、昨年12月に2週間の研修を受けたモデル教師のひとり。「長年教えてきたが、教本を読み上げるのではなく、子どもたちの興味をかき立てて積極的に発表させるやり方は効果的だと感じました。私たち教師にとっても研修は良い刺激になりましたね」。何年生で何を教えるかなど、当たり前と言えば当たり前*の授業計画の大

切さも、教員の間で共有されるようになったという。

中村は「教え方以前に、教員自身の基礎的理解の底上げから手を付けなければなりません。それでも、教員たちは『この国を何とかしたい』という強い使命感を持っていて、給料の遅配があっても『内戦中はおもったひどかった』と頑張っています。そんな彼らを少しでもサポートできればと思いつけた5年間でした」と振り返る。

南スーダンは小学校（8年）の修了率10数%、識字率は27%とされる。昨年成立した教育法では、国家予算の2割を教育分野に充てることが明記されたが、この国の行政機能は未だ不完全かつ不透明であり、これまでも教育予算の何割かは地方の現場まで届かず霧消している。およそ額面通り物事が進むとは思えないが、中村たちが撒いたタネが大切に生まれ、芽を出すことを信じている。



もうひとつ、南部スーダン自治政府時代に始まった代表的プロジェクトが7月末に終了した。国立ジュバ職業訓練センター（MTC）を拠点とする技術協力「基礎的技能・職業訓練強化プロジェクト」（通称SAVOT）である。MTCは第1次スーダン内戦終結直後の1973年、国連開発計画（UNDP）や国際労働機関（ILO）の支援で設立され、83年からの第2次内戦中は軍や避難民に占拠されて閉鎖状態にあった。JICAとドイツ国際協力公社（GIZ）の支援で訓練を再開したのは、四半世紀を経た07年4月であり、その歩みは南スーダンの歴史をそのまま映している。

筆者は南スーダン独立直後の11年8月に初めてMTCを訪問し、その後2度ほど立ち寄っているが、4月に再訪すると施設が大幅に改善されていた。SAVOTによる宿泊施設と食堂の新設、日本政府の紛争予防・平和構築無償による教室棟・管理棟建設と実習棟2棟の改修が完成し、車の



理科研修でコンパスを使う教員たち=SMASESSチーム撮影